

通俗軍書作家馬場信意の方法

——『義経勲功記』と『異本義経記』の比較をとおして——

山本 淳

はじめに

稀代の武将、源義経。その華やかな前半生と悲劇の後半生は、世々の人々の興味、関心を引き〈判官物〉とも称される多種多様な文芸作品の材となってきた。

その一つに、近世前期の通俗軍書作家、馬場信意の著作『義経勲功記』^①がある。義経の一代記を描く『義経記』の近世期における展開である『勲功記』は、その後の〈判官物〉（特に読み本）の先鞭の一つとなった。この『勲功記』に関しては近年、その末尾に収載されている義経蝦夷地渡島伝承から近世期の〈異国観〉を読み解こうとする考察がなされるようになってきている^④。しかし、著者馬場信意や彼の他の著作に関する研究は多いものの『勲功記』そのものの研究は未だ多くはないのが現状と言えよう^⑤。

本稿では、この『勲功記』の典拠資料とされる近世前期成立の『異本義経記』^⑥との比較を通して『勲功記』の意図および近世期における義経伝承の展開の様相を考察していくことにする。

一、『義経勲功記』と『異本義経記』

ア、『義経勲功記』について

馬場信意の著作『義経勲功記』は、大本全二〇冊（本編一九卷・目録序文等一卷）、正徳二（一七二二）年序の初版、京の田井利兵衛蔵板である^⑦。宝永二（一七〇五）年に『朝鮮太平記』を出版した信意はその後次々と通俗軍書を著し、正徳二（一七二二）年に『源氏一統志』と『勲功記』を出版した。信意の著作が人気が高かったことは、『享和再版増補改正』和漢軍談紀略考』という摺物に、『勲功記』を始め信意の著作が多数記載されていることからうかがえる^⑧。

『異本義経記』と関連した主な先行研究として、島津久基氏^⑨、志田元氏^⑩、倉員正江氏^⑪、岡田美穂氏^⑫のものがある。ここでは、

『興廢記』よりは一年（但し脱稿はそれより早いことが序文でわかるが）『勲功記』よりは九年も早く出たこの『義経記評判』に引いてある以上、『知緒記』の成立は更に早いことが知り得られる。即ち

『知緒記』↓『義経記評判』↓『勲功記』↓『鎌倉実記』（享保二年刊）の順に『知緒記』の記事が踏襲されて行つたと観てよいであらう^⑬。

とあるように『異本』から『勲功記』などへの流れが示されている。しかし、同じ馬場信意の著作でも『曾我勲功記』や『曾我物語評判』^⑭といっ

た『曾我物語』に取材した通俗軍記のように活況を呈しているとは言い難く、『勲功記』の依拠資料としての『異本』という指摘に留まっている。

イ、「異本義経記」とは

ところで『勲功記』の依拠資料として重要な作品として『異本義経記』がある。次にこの『異本』について概観してみることにする。

『異本』は近世前期に成立したとされ、構成は『義経記』（室町時代初期成立か）に倣いながらも『義経記』にみられない異伝・俗伝を多く収載していることが、その大きな特徴である。他にも、物語的な内容とともに記録調の簡潔な箇条書きの記述がみられる、本文の後に付された一段下げの記事や本文頭注や傍注の存在がある、などの特徴もあり、これらのことから「軍記評判」の影響を受けたものと考えられる¹⁶。また『異本』に記事を増補した別本ともいべき『義経知緒記』なる題を有する系統も存在する。『異本』全体として一〇本の諸本が確認されている¹⁷。

二、「夢伯問答」の検討

『義経勲功記』は『異本義経記』を主な依拠資料としている。本章では、その引用の姿勢と方法を両者の比較から検討してみることにする。そこで『勲功記』と『異本』の具体的な比較として『勲功記』の序に当たる「夢伯問答」を取り上げ、検討していくことにする。

ア、「夢伯問答」について

『勲功記』巻一の直前に置かれている首巻には、睡鵬子による「義経勲功記序」に続いて「夢伯問答」という同書の成立事情を示す全体の導入

部に相当する一段がある。まずその冒頭を要約すると次のようになる¹⁸。

「希代ノ英雄」である源義経の寵臣であった常陸坊海存は「仙境」に入って現在まで存命していた。私（著者馬場信意）の友人である「睡椿子安達東伯」が、奥州で海存に出会い義経などの事績を聞いて「一部ノ書」として纏めた。東伯は世間に流布している「義経記。平家物語。源平盛衰記。吾妻鏡等」と海存の語りには相違が多いとし、「後世ニ義経ノ事実ヲ。伝」えようと思うが老齢でそれも叶わない。そこで私に「一部ノ書」を基にして「事実」を世に伝えてほしいと願う山陽で客死してしまふ。そのため私が代わりに出版することにした。

東伯が奥州に下り名所旧跡を訪ねて回り、衣川のほとりにしばしば滞在する。不思議な老法師を見かけた東伯は、ある日その老法師に語りかける。普段は「駒形峰」に住むというその老法師は、自分が海存であり「晴庵主」や「残夢仙人」とも名乗ったことがあると告白する。

海存と懇意になった東伯は、海存の住む「駒形嶺」をしばしば訪ねて義経の時代の話を聞くことになった。

こうして東伯と海存（以下、残夢）の問答が始まるのである。「残夢」は実在の人物であるかは不明であり、馬場信意の創作である可能性が高い。もともと枸杞の実や人魚の肉を食べて不老不死となった残夢（海尊）などのような人物から源平合戦の頃の話を聞くとという伝承は数多く伝承されており¹⁹、こうした伝承を念頭に置いて「夢伯問答」が創出されたと考えられる方が妥当であろう²⁰。また全体の構成をみても、残夢伝承は『異本』下巻の末尾には一段下げの記事の形で多数収載されているのに対し、『勲功記』では最終巻（巻十九）が義経蝦夷渡海伝承を基にして結ばれている（「勾当八秀実攻落泉屋並義経渡海蝦夷事」）ため冒頭に配したと考えられる

のである。この配置の転換はさらに、残夢から聞いた話が基になって『勲功記』が作られたと設定することで当時流布していた『義経記』などは異なる（もう一つの『義経記』）であることを示す効果を出しており、作者馬場信意の創意がうかがえるといえよう。

『異本』には、例えば次のような残夢伝承がみられる。^②

往昔奥州ニ残夢ト云者アリ。出生行年知レス。元暦文治ノ事ヲ能語ル。義経又ハ家人ノ人相マテ語ル。義経ハ今世ニ云ヤウニハアラス。無男ナリ。弁慶モ人ノ云如クナル姿ニテハナク、美僧ト云リ。常ニ常陸房海尊ナル由自称ス。主君ノ滅期ノ所ナレハ、懐歎、其跡ヲ慕ヒテ衣川ノ辺ニ至ル所ニ、老翁来リテ、我ニ赤色ノ菓ヲ与フ。其味甚タ美ナリ。其後無病長命ト云リ。古事ヲ知りタル者アリテ、昔ノ事ヲ尋ル時ハ其ノ答ヘ不_二分明_一。世人偽詐ノ輩ナリト云リ。

ここで注目されるのが、傍線を附した記述である。『勲功記』では東伯が滞在したのが「衣川ノ片辺_{カクハト}リニ。引籠_{コモ}ツテ。逢隈川ノ清キ流_{キヨ}レニ。凡心ノ垢_{アカ}ヲ洗_{アラ}ヒ。」とあり、『異本』における海尊（海存）の出現場所と共通している。^②

次に問答の内容を要約して列挙してみると、

A、残夢が仙人になった経緯

〈i 義経西国落事〉〈ii 義経吉野入事〉〈iii 船弁空言説〉〈iv 忠信吉野合戦空言説〉〈v 奥州落事〉〈vi 義経社事〉〈vii 逢隈川上流得人魚肉事〉〈viii 伊予国久万種快法師事〉

B、義経の容姿に関する俗説

C、播磨国教心寺教心上人の事

D、義経一行蝦夷渡海の事

〈i 「ホウクワン」社事〉〈ii シヤムシヤイン義経後胤事〉

E、馬場信意の考証（「私曰」という一段下げの記事）

〈i 蝦夷義経大明神事〉〈ii 佐世石見守伝義経蝦夷渡海事〉

F、義経郎等第一の忠臣は誰か

〈佐藤継信・忠信兄弟事〉〈教経首級真相事〉〈碁盤忠信不忠事〉〈弁慶第一忠臣事〉

となる。この中で『異本』と共通する内容をもつものを挙げ、『異本』の当該章段名と対比させると次のようになる。

『勲功記』

A 〈i 義経西国落事〉

〈vii 逢隈川上流得人魚肉事〉

〈viii 伊予国種快法師事〉

B (ナシ)

C (ナシ)

D 〈i 「ホウクワン」社事〉

〈ii シヤムシヤイン義経後胤事〉

E 〈i 蝦夷義経大明神事〉

〈ii 佐世石見守伝義経蝦夷渡海事〉

『異本』

〔25 D 義経都落〕（※一部）

〔45 f 奥州残夢事〕（※類似）

〔45 h 伊予国久万珠懐上人事〕

〔21 b 瀬源五山本義経双六対決事〕

〔45 d 播磨国教心寺教心上人事〕

〔45 k 蝦夷シヤムシヤイン義経後胤事〕（※類似）

〔45 k 蝦夷シヤムシヤイン義経後胤事〕

〔44 b 永祿蝦夷義経大明神事〕

〔45 c 義経蝦夷渡海事〕

このように、そのほとんどが『異本』に依拠していることが分かる。このうち〔45 k 蝦夷シヤムシヤイン義経後胤事〕は『異本』諸本の中でも『知緒記』系統諸本と（高松本）のみにみられる増補に共通している。このことから、『勲功記』が『知緒記』系諸本を参照している可能性が高いことが分かる。

また『異本』にみられるように残夢なら残夢の伝承を複数列挙することとはせず、種快法師や蝦夷渡海伝承、義経の容姿など諸伝承をまんべんなく配置しており、著者信意の配慮がうかがえるともいえよう。他に『異本』一段下げの記事からの引用がほとんどであるが、その中でも出典が明記されているものが半数の四例^②もあり、東伯の聞き書きを基にしてい

る体としてはいるが典拠の明確な記事を「夢伯問答」に取り入れようという意図が考えられる。なお、こうした義経蝦夷渡海伝承や残夢伝承への関心は『勲功記』のみではない。例えば『和漢軍書要覧』上巻にある『勲功記』の紹介が、

同（義経）勲功記 二十一卷 馬場信意撰

卷首ニ残夢問答アリ此書ニハ義経主従奥州ニテ自殺セス常陸坊ガ仙術ニテ蝦夷ガ島ニ渡リ弁慶ガ素性并北国落ナド大ニ異ナリ

とあることからうかがえる。

イ、播磨国教心寺教心上人伝承の比較

それでは『勲功記』は『異本』をどのように取り込んでいるのか。本節は具体的に播磨国教心寺教心上人の記事を取り上げて比較していく。

『勲功記』

①又播磨ノ国野口ノ里ニテ村老ノ語リツルハ。此ノ所ノ教心寺ノ開山教心上人ト云ヘルハ。昔ノ義経朝臣ニテアリシガ。高館ヲ落テ此ノ所ニ来リ。法体染衣ノ身トナリ。教心ト名ヲ改メ。討死セシ郎等ノ。菩提ヲ弔ヒ玉ヒシガ。其後臨終正念ニシテ。往生ヲ遂玉ヘリ。其跡ニ一字ヲ建立シ。教心寺ト号シ候ナリト語リシガ。②是レモ大ナル誤リナリ。察スルニ波多野右馬允義経。平家ノ方人トシテ。源氏ニ属セザリシユヘ。治承四年。鎌倉頼朝卿。討手トシテ。下河辺庄司行平馳向ヒケルニ。波多野。相州松田ノ郷ニテ。自害セシト偽ツテ。逐電セシト聞ツルガ。③定メテ西国ニ落下リ。発心ヲ起シ出家シテ。教心上人ト号セシナラン。

『異本』

①又播磨ノ国野口ノ里教心寺ノ開山教心上人ハ源義経ノ由。高館ヲ

落テ此所ニ至リ発心アリ教心ト名ヲツキ討死シタル郎等ノ菩提ヲ弔ヒ給ヒシカ、其身モ爰ニテ遷化アリ。其跡ニ一字ヲ建立シテ教心寺ト号スト里人ハ云リ。②若波多野右馬允義経ナルカ。治承四年頼朝公ノ責ヲ受テ討手下河辺庄司行平寄来ラサル前ニ相模国松田卿ニテ自殺ストアリ。謀テ其期ヲ通タル事モヤ。③其比又近江源氏山本兵衛尉義経ナトノ同名アレハ其実如何。

内容によって①～③に区分し両者を比較してみると、教心上人と源義経は同一人物であるという俗説の部分（①）は語句の異同や記述の多少の増減はあるものの特に問題になる記述はみられない。ここで問題となるのは②・③の記事である。まずBであるが、『異本』では教心上人と源義経が同一人物であるという俗説に対して同時代にいた「波多野義経」と混同しているのではないかと別案を提示し存疑としている。対して『勲功記』は波線にあるように全くの誤りであると断定している。ここは残夢が東伯に答えている箇所であることから、信意は『異本』を単純に取り込むだけではなく反例として批判的に組み込んでいることが分かる。こうした姿勢は、例えば前頁で示したE、「馬場信意の考証」は「私曰」という一段下げの記事であるがここは『異本』からの引用（二種類）で構成されている。ここでは残夢の語った話を「能符号セルコト多シ。」と肯定的に引用しており本文の内容を補完しようという姿勢であると言える。また『異本』で「…モヤ」で結ぶことで内容を推定して終わらせているのに対して『勲功記』では「…ト聞ツルガ」と「あたかも残夢がその当時間いた話である」とすることで俗説の否定をより強調している。さらに②では、③で展開した教心上人は源義経にあらざという自説を①の内容を要約して繰り返している。一方『異本』ではさらに「山本義経」かもしれないと俗説に対する考証の姿勢をみせており、読み物としての性

格ももつ通俗軍書『勲功記』と姿勢の相違を明確にしている。

ウ、通俗軍書としての『義経勲功記』

ところで、『異本』を引用していない箇所には『勲功記』のどのような特徴がみられるだろうか。本節では「夢伯問答」の最後に位置する「F、義経郎等第一の忠臣は誰か」を取り上げる。まず梗概を示してみる。

様々な「珍シキ物語」を聞いた東伯がある日残夢にある質問をした。それは佐藤継信・忠信兄弟が義経の「第一ノ忠臣」であったのかというものであった。その証拠には何があると逆に聞かれた東伯は、継信は八島戦、忠信は都で義経の代わりとなつて奮戦したことを話す。それに対して残夢は「イヤ左ニハアラス。当世大ニ誤リヲ伝ヘシ事アリ。」と一蹴し教経の死に纏わる（真説）を披露する。そして戦場で討ち死にすることは「常ノ事」として継信を、都で女に現を抜かし碁盤で戦うなど「忠臣勇士ト称ズベキ所謂ナシ」として忠信を否定してみせる。そして「学智ヲ兼テ。謀略ノ智臣」で「無二ノ忠臣」として武蔵坊弁慶を挙げ、次いで亀井六郎を挙げた。この他にも東伯は残夢から「義経一代ノ故事」を聞きそれを書き留めていた。私（馬場信意）がそれを基に纏め直して書いたのがこの『勲功記』である。

ここでは〈佐藤継信・忠信兄弟事〉〈教経首級真相事〉〈碁盤忠信不忠事〉〈弁慶第一忠臣事〉と大きく四つに内容を分けることができるが、どれも『異本』にはみられない。

中でも興味深いのが忠信を徹底的に否定する姿勢である。残夢は忠信の、主君義経の残党を探し出すこともせず「女ニ心ヲユルシ。ウカトシテ」いた点や「盤石」ではなく敵と戦うのに碁盤を使った点を非難

しており、これはそのまま作者である信意の意見とみてよい。都で討手と戦う際に碁盤を投げつけるいわゆる「碁盤忠信」として著名な忠信の奮戦は金平本浄瑠璃「碁盤忠信」（延宝四（一六七六）年）をその初見とされるが、他の浄瑠璃や歌舞伎狂言に比べても『勲功記』が早い例であることが分かる。こうした通説を否定する手法は、逆説的にそれだけ「碁盤忠信」の伝承が認知されたものであったことを示しているよう。また「忠臣」とは何かという命題に答えようとする姿勢は「あるべき武将」の規範を示そうとする意思が感じられるものの、娯楽読み物としての通俗軍書の範疇を出ないものである。

おわりに

本稿では『義経勲功記』冒頭の「夢伯問答」を取り上げ、『異本義経記』がどのように取り込まれていったかを確認してきた。結果、従来の研究史で指摘されてきたとおり『勲功記』は『異本』にその多くを取材して成立していることが確認できた。そこには、正伝・俗伝、正史・稗史を問わず様々な伝承（特に『異本義経記』を貪欲に取り込んで源義経の一代記を創出しようという通俗軍書作者馬場信意の意図があった。そして単なる取り込み・貼り付けではなく、創意工夫をもって手を加えていったことが確認された。

村田明彦氏は、『曾我勲功記』の成立過程において馬場信意は『曾我物語』の〈異本〉と目される『曾我物語』（村田氏いうところの『異本曾我』）を取材源の一としていたと結論づけた。この指摘は、そのまま『異本』と『勲功記』の関係に等しいといえる。しかし共通しているとはいえず、『勲功記』は『曾我勲功記』のように「偽書」に取材することで従来の『義経』の軍談の『闕略』を補い、完全緊密な「義経」の軍談を構築し

ようという意図はうかがえるものの必ずしもそればかりではない。それは『勲功記』冒頭に位置する「夢伯問答」の存在である。この「夢伯問答」は取材される「《偽書》」の出自を明らかにしている。それは不老不死の仙人残夢と東伯老人の問答というきわめて〈伝奇的〉な世界である。こうした〈伝奇的〉な世界への志向性が近世期の〈判官物〉にも不可分なものであると言えるのではないだろうか。逆に言えば、〈伝奇的〉な異伝・俗伝を「夢伯問答」に集約させることによって『勲功記』は「完全緊密な」義経「の軍談を構築」しようとしたのであろう。^⑧

〈正史〉として統一された新たな世界を創出するために多種多様な「俗伝」を吸収し、結果新たな〈義経伝〉が生み出されたのである。^⑨

注

- ① 馬場信意については長友千代治氏「近世における通俗軍書の流行と馬場信武、信意」（愛知県立大学国文学会『説林』二五、一九七六・一一）など。
- ② 以下『勲功記』と略す。
- ③ 読み本以前には他に小幡邦器著『義経興廢記』（元禄一七（一七〇四）年刊）がある。
- ④ 金時徳氏「義経入夷説と朝鮮軍記物」（同氏著『異国征伐戦記の世界——韓半島・琉球列島・蝦夷地——』（笠間書院、二〇一〇・一一）所収）、徳竹由明氏「敗將の異域渡航伝承を巡って——朝夷名義秀・源義経を中心に——」（青山学院大学文学部日本文学科編『日本と〈異国〉の合戦と文学——日本人にとって〈異国〉とは、合戦とは何か』（笠間書院、二〇一二・一一）所収）など。
- ⑤ 濱田啓介氏「近世に於ける曾我物語の軍談について」（同氏著『近世小説・嘗為と様式に関する私見』（京都大学学術出版会、一九九三・一二）所収）、村田明彦氏「馬場信意の通俗軍書——もう一つの『曾我物語』をめぐって——」（『近世文芸』六二、一九九五・六）、田中則雄氏「解題・『曾我物語評判』（京都大学文学部国語国文学研究室編『京都大学蔵大惣本稀書集成』五・軍記（臨川書店、一九九六・九）所収）、小井土守敏氏「馬場信

意著『曾我物語評判』の序文に関する覚え書き」（筑波大学平家部会論集）八、二〇〇〇・一二）、井上泰至氏「通俗軍書作家馬場信意の誕生——『朝鮮太平記』を中心に——」（昭和女子大学『学苑』八〇四、二〇〇七・一〇）など。本稿は濱田氏、村田氏の御論考に示唆されることが多かった。

⑥ 以下『異本』と略す。なお『異本』諸本のうち高松市立歴史資料館蔵本が『勲功記』の記事を増補して成立していることを拙稿「高松市立歴史資料館蔵『異本義経記』について」（『伝承文学研究』六一、二〇一二・八）で指摘した。

- ⑦ 注①参照。なお享保六（一七二二）年刊本も存する。
- ⑧ 架蔵。刊記無し。摺物一枚（両面）。刊行順に挙げると『朝鮮太平記』『北国太平記』『南朝太平記』『源氏一統志』『義経勲功記』『北条太平記』『義貞勲功記』『中国太平記』『曾我勲功記』の九作品（注①参照）に上り軍記関係で記載されていないものはわずか三作品に過ぎない。なお同資料には、信意の父信武の著作も「通俗軍志」という中国通俗軍書の翻案作品の欄に三作品記載されており（『通俗続三国志』『通俗続後三国志』『続後通俗三国志後編』）馬場親子の人気のほどが確認できる。
- ⑨ 島津氏著『義経伝説と文学』第二部「義経文学（判官物）」第一章「文学として現れた義経伝説」第三節「小説としての義経伝説」（大学堂書店、一九三五・一初版、一九七七・五再版）。
- ⑩ 志田氏「異本義経記（下）・『異本義経記』覚書」（『伝承文学研究』五、一九六四・一）。
- ⑪ 倉員氏「『義経盤石伝』と先行史書」（『国文学研究』八九、一九八六・六）。
- ⑫ 『義経勲功記』解説」（『軍記物語研究叢書四』『未刊軍記物語資料集4義経知緒記・義経勲功記』（クレス出版、二〇〇五・九）所収）。
- ⑬ 注⑨参照。
- ⑭ それぞれ正徳五（一七二五）年、同六（一七二六）年の刊。
- ⑮ 『異本』に引用されている『丹後海陸巡遊日録』と『異本』を引用している『義経記評判』の成立時期から、延宝五（一六七七）（元禄十六（一七〇三）年の間には成立していたと考えられる）。
- ⑯ 拙稿「『異本義経記』と『太平記評判秘伝理尽鈔』（『軍記と語り物』三四、一九九八・三）。

⑰ 諸本として『異本義経記』という書名をもつものに、

I 叡山文庫蔵本（叡山本）

II 静嘉堂文庫蔵本（松井簡治氏旧蔵）片仮名本（静カ本）

III 静嘉堂文庫蔵本（松井簡治氏旧蔵）平仮名本（静ヒ本）

IV 名古屋市鶴舞中央図書館河村文庫蔵本（上巻のみ）（河村本）

V 永井義憲氏蔵本（国文学研究資料館蔵マイクロによる）（永井本）

VI 高松市立歴史資料館蔵本（高松本）

『義経知緒記』の書名をもつものに、

VII 国会図書館蔵本（国会本）

VIII 内閣文庫蔵本（内閣本）

IX 尊経閣文庫蔵本（尊経閣本）

X 大東急祈念文庫蔵本（大東急本）

がある。うちIX、X稿者未見。Iを最古本としてそれに増補を加えていくII〜V・VIII、さらに増補を加えたVI（注⑥拙稿参照）という大まかな流れが指摘されている。先行研究として、大城実氏「『異本義経記』諸伝本に関する考察——特に『義経知緒記』との前後関係を中心にして——」（『立教高等学校研究紀要』一八、一九八七）、西村知子氏「『異本義経記』の展開とその享受——『義経記』変容の一過程——」（『同志社国文学』五八、二〇〇三・三）がある。

⑱ 『勲功記』本文は軍記物語研究叢書四『未刊軍記物語資料集4義経知緒記・義経勲功記』（クレス出版、二〇〇五・九）所収の大阪府立中之島図書館石崎文庫蔵本（影印）に拠り、一部表記を改めたりしている。

⑲ 柳田國男氏「東北文学の研究」（同氏著『柳田國男全集』三（筑摩書房、一九九七・一二）所収）桑田さきほ氏「義経記の根柢」（『日本文学論究』一四、一九五四・四一）、野村純一氏「藜の杖と椿の油——二つの不老長寿説話——」（『椿は何故「春の木」か——「八百比丘尼」と「常陸坊海尊」——」（同氏著『野村純一著作集』六（清文堂、二〇一二・二）所収）など。

⑳ なおこの「夢伯問答」のような成立事情を示す一段を冒頭に配する構成は、『源氏一統志』『曾我勲功記』『北条太平記』といった馬場信意の他の著作にはみられないものである。義経の一代記を語り伝える存在は長寿であらねばならないという伝承心意の強靱な姿を『勲功記』も示している。

いえる。注⑱桑田氏論文参照。またこうした残夢のような存在は、合戦などの「体験者の活きた談話」が流行した近世初期の時代背景と無関係ではないとも考えられる。桑田忠親氏「古老談の聞書」（『国学院雑誌』六一・一〇、一九六一・一〇）、同氏著『大名と御伽衆増補新版』（有精堂出版、一九六九・六）など。

⑳ 〈叡山本〉の「45 f 奥州残夢事」。本文は志田元氏「異本義経記・下」（『伝承文学研究』五、一九六四・二）に、「45 f 奥州残夢事」などの『異本』の章段名は注⑥拙稿に拠る。なお傍線、句読点は私に附した。

㉑ ここで「逢隈川」としているのは「北上川」の誤りであろう。「夢伯問答」には後に「逢隈川（衣川ハ。駒形カ嶺ノ麓ヨリ流レ出。逢隈川ニ流レ入ル。逢隈川ハ大河。衣川ハ小河也）」という記述もあることから確認できる。

㉒ それぞれ「21 b 瀬瀬源五山本義経双六対決事」が「長谷川本」（45 k 蝦夷シヤムシヤイン義経後亂事）が「松崎者語」（44 b 永祿蝦夷義経大明神事）が「永祿評定記」（45 c 義経蝦夷渡海事）が「佐世石見守語曰」となっている。

㉓ 講釈師吉田一保編著。二冊。明和七（一七七〇）年刊。引用は早稲田大学図書館・古典籍総合データベースに拠る（安永七（一七七八）年刊本）。
㉔ 他にもA（VIII伊予国種快法師事）が記事内容を増補させながらも『異本』の「45 h 伊予国久万珠懐上人事」を踏襲しその末尾に「去レバ仙人トナル事。我々バカリニアラズ。」とする箇所なども単純に『異本』を取り入れている例といえる。

㉕ ただし『勲功記』本文中にもこの「甚盤忠信」がみられる（巻十七「佐藤四郎兵衛尉忠信最期」）が、ここでの忠信は勇猛果敢に討手と戦い割腹して果てたことに対して「惜哉忠信ハ。義経ノ股肱耳目ノ重臣ナリ。」と評されており、「夢伯問答」での忠信評とは全く異なっていることに注意が必要である。

㉖ 浄瑠璃では竹田出雲作『右大将鎌倉実記』が享保八（一七二三）年初演、歌舞伎狂言では『甚盤忠信』が享保十三（一七二八）年初演などがある。なお自作の浮世草子『義経風流鑑』は正徳五（一七一五）年刊であるが舞台を吉野山としている点で『勲功記』と異なる。

②⑧ 注⑤村田氏論文参照。

③⑩ 西村知子氏「『義経記評判』にみる『義経記』理解の試み——近世における『義経記』受容の一例として——」（『同志社国文学』五九、二〇〇三・一一）。

③① 明確な「史書」「軍書」としての性格を志向する『曾我勲功記』研究が盛んになされることに比べ、『勲功記』の扱いが難しいのはこの辺りにあるのではないだろうか。また『勲功記』には義経渡海譚を〈正史〉として認識しようという意図があったとも考えられるが、『勲功記』自体が「残夢の語りの聞き書き」という体裁を取っておりあくまで〈伝奇的〉とも言える。

③② 『異本』諸本の一つ、〈高松本〉の注目すべき特徴として「独自記事のうち『義経勲功記』からの引用が多い」ことをすでに指摘している（注⑥拙稿参照）。『勲功記』全体と〈高松本〉の関係については別稿を期したい。

〔附記〕

本稿は、伝承文学研究会関西例会（二〇一二年十一月二十五日、於キャンパスプラザ京都）における口頭発表をもとにしたものである。席上御教示を賜りました諸先生方に感謝申し上げます。

また、貴重な資料の閲覧を許可された諸機関に厚く御礼申し上げます。

衣笠キャンパス内でお目にかかるといつも中西健治先生から話しかけてこられた。稿者にとって先生とは、その時の優しい笑顔である。また、時に厳しく時に温かく教え子と接する教育者としての真摯な姿である。先生、ありがとうございます。

（本学非常勤講師）